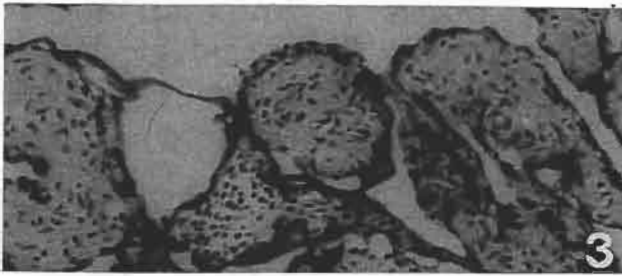
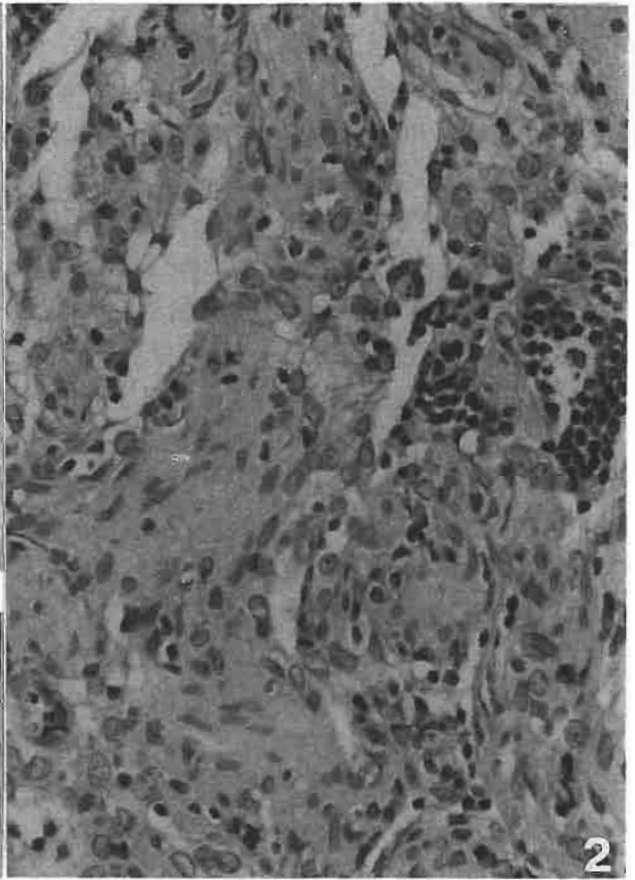
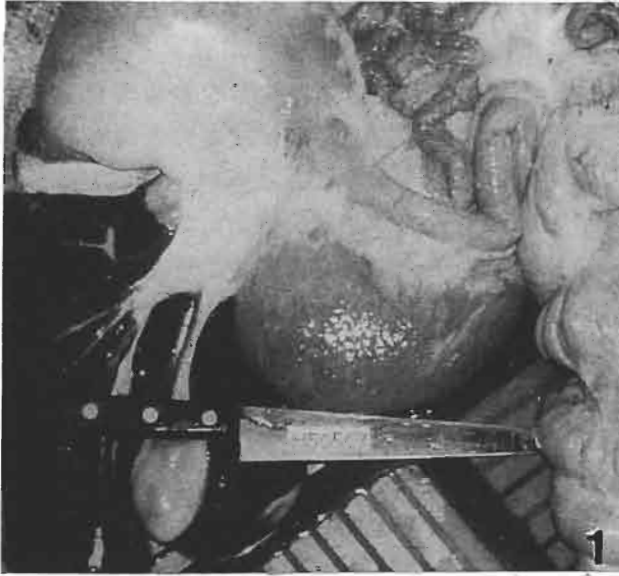


豚の膵・十二指腸部の嚢胞

岩手大学農学部家畜病理学教室・山形庄内食肉検査所出題
第34回獣医病理学研修会標本No.617



動物：豚，LW系，雌，6カ月齢。

臨床的事項：平成5年5月7日，酒田市食肉処理場に一般畜として搬入されたもので，特に臨床的に異常は認められなかった。

剖検所見：胃の幽門部付近から十二指腸・膵臓の漿膜面にかけて胃と同等大（20×15×10 cm）の波動感を有する楕円形の嚢胞が認められた（写真1）。嚢胞と正常組織との境は明瞭で，嚢胞に割を入れると水様物が流出し，次第に寒天状に凝固した。嚢胞内面は編目状で，部位によっては均質無構造充実性であった。他の組織には著変はみられなかった。

組織学的所見：充実性の領域では分岐吻合の顕著な管腔形成と平滑筋線維の束状増生がみられた（写真2）。管腔を内張りする細胞は扁平で，楕円形の腫大した核もしばしば認められた。成熟リンパ球の集簇が散見され，好酸球もときおり浸潤していた。毛細血管も発達していたが，血管系以外の管腔内に

赤血球は認められなかった。食物繊維，石灰化を伴う異物反応巣もまれに認められた。渡銀染色では，基底膜領域と平滑筋周囲を好銀線維がとり囲んでいた。免疫組織化学的検査では，管腔を内張りする細胞は，第八因子関連抗原に対して陽性を示した（写真3）。

考察：組織学的に管腔形成を特徴とすることから，リンパ管もしくは血管系腫瘍が考慮され，免疫組織化学的にも支持されるものであった。管腔内には赤血球を入れず，リンパ球集簇が散見されることからリンパ管系の腫瘍とするのが妥当と考えられた。さらに顕著な平滑筋増生もこの腫瘍の特徴で，人で報告されている「リンパ管筋腫 lymphangiomyoma」に一致するものではないかと思われた。このような症例は動物では報告がなく，稀有な症例と思われた。

診断：豚の膵・十二指腸部に見られたリンパ管筋腫。